

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
凡士	のり子	朝香 稀香 音思 あきひこ 鶴城				土璃	稀香 佳月	きいち 寒立馬 風舎 徹齋 俳翁 しーしー 六弦		凡士			月を	霜里
姦しき中に哀愁蝉時雨 <small>早くも玄関先に落蝉が、今夏も幾度見るだろうか。</small>	サイクリング夏じりじりとじりじりと <small>猛暑の自転車こぎの過酷さを端的に表現。</small>	蝉時雨青菜をざつと濯ぎけり <small>みずみずしい青菜、水の跳ねる音、夏の勢いを感じる。季語の斡旋が良い。里山の魅力が満載です。蝉時雨の中、引き抜きた青菜の泥を清流ですすいでいる。夏のなんでもない一コマをうまく捉えている句です。「ざつ」とに生活感。蝉時雨とざつと濯ぐの取り合わせが秀逸。</small>	気がつけば県境過ぎし夏の山	向日葵と狂しき陽とゴツホかな	底紅の紅ぬれぬれと散華かな	校門からどつと自転車梅雨明ける <small>夏の光への期待が伝わり、勢いがあります。季語が効いています。</small>	背なで愚痴さらりと躲（かわ）し胡瓜揉む <small>気性のさつぱりした賢い女性を描いている。旦那さんの愚痴でしょうか？粹な句ですね。</small>	つなぎ脱ぎをんなにもどる藍浴衣 <small>着替えて女つプリの上がつた様子が伺えて涼し気である。彼女の変わり身の良さ（早さ）が伝わる。遅く働く女性のワークライフバランスの景を見事に詠んだ。どんな藍浴衣姿なのかと、色々と想像が膨らむ。変身の様子が面白い。つなぎから藍浴衣への女性の変身をうまく詠んで、ある意味艶めかしい。仕事でしょうか、レースでしょうか。このギャップが何ともいいですね。「うるせい」とちやちやを入れたくなる位、小粋。</small>	傾いた標の先の仰ぐ滝	サザンの歌生きよ生きよと聞こゆ夏 <small>ご同輩、老いてもファンはファン、茅ヶ崎ライブが待ち遠しい。</small>	今年竹羨す目あらは涙ぐみ	美しきことが罨なり蟻地獄	蜘蛛の罫の顔に張り付く朝の畑 <small>座五の「朝の畑」は出来過ぎです。</small>	麦酒掛けシューアゲインの言葉飲む <small>お墓参り、立ち去り難い気持ち。</small>
衛	あきひこ	小川夏霖	秋谷風舎	清川徹齋	しんい	森佳月	荒一葉	河野凡士	しーしー	新井史子	高原ひろし	荻野鷹生	檜鼻ことは	持永喜夫

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	水明インターネット句会（選句・選評） 令和五年七月
	ひろし 月を しんい	凡土 のり子			一葉 山菜	しんい	朝香	みづる	かげろう		土璃 道を ことは あきひこ 徹斎 しーしー マスミ しんい	美枝子 京子	マスミ		
大蜘蛛の隅まで追われ一文字	金魚袋幾度ものぞき帰る子や <small>座五の「や」は珍しいです。狭いビニール袋の中の金魚が心配でたまらない。</small>	ジヨバンニの涙のわけや夏の夜	先輩に補給の水と団扇風	あいの風吹く万葉の夢の中 <small>甲子園目指して地区予選の真つ最中、出句のタイミングがよい。部活の夏休みが復活した息遣いが伝わる。</small>	みどりごの天花粉待つふぐりかな <small>丸々と肥えた嬰兒のオムツ替えでしょう。微笑ましい情景が目には浮かぶ。天花粉待つふぐりという措辞がすばらしい。なかなかこうは詠めないものだ。</small>	「團十郎茶」の風格凜と朝顔市 <small>入谷の朝顔市「團十郎」と名付けられた幻の朝顔。</small>	風鈴の音がささやく夢心地	月星はいまも変はらずキャン普張る <small>風鈴の音を夢心地で聞きながらウトウト、最高ですね。</small>	夏空を銀の矢印一直線 <small>目を閉じ座していると、全身が無になり、あたかも音の中に閉じ込められたような気がする。</small>	夏館先祖の睨む午餐会 <small>ジェット機の音まで聞こえてきそう。</small>	片蔭を拾ふ小江戸の石畳 <small>江戸情緒が映像として浮かびます。「小江戸」がいいです。粋な御句です。昔の粋な情緒を思い出します。石畳も焼けてますね。片蔭を拾ふの措辞が良い。涼を求めて片蔭を選びながら小江戸川越の散策を楽しむ「粋な」人が目に浮かぶ。類句と言うより殆ど同じ、小江戸と馬籠の地名が入れ替わっているだけ。あしたネットのサイト、7月の兼題「片蔭」に記載有り。片蔭を拾ふの措辞が良いです。「拾ふ」が効いている。</small>	水中花酔って昔の恋自慢 <small>艶っぽい句誰に聞かせているのかな。江戸期には「酒中花」とも言われたユーモアある取り合わせ。</small>	子燕よ今日はデビューの燕尾服 <small>家の軒先に燕が巣を造った。巣立ちの日を楽しみに待っていたが、今日がそうらしい。深く切れ込んだ立派な燕尾を持つていてではないか。</small>	珍しき蠅取りリボン小屋にあり	
小林土璃	後記朝香	石関六弦	本橋稀香	龍野ひろし	俳翁	丸山マスミ	後藤允孝	立野音思	みづる	反町修	森美枝子	新暦文	光雲2	幸子	

45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	水明インターネット句会（選句・選評） 令和五年七月
	ひろし 月を	小麦	ひろし		土璃 六弦 京子	ひろし 霜里 みづる	稀香	俳翁		山菜 音思	佳月			允孝 せんり 山菜	
法師蝉一途の声の暮れゆけり	桑の実を祖母の土産に三つほど <small>座五の「三つほど」は頃合いでしようか。</small>	失恋の少年泣けりソダ水 <small>少年よ、これから何回か経験するであろう恋を今は辛くとも後になつて懐かしく思う日がきつと来るはず。</small>	万緑の中走る人止まる人	仰ぎ見る杉の木立や著莪の花	かき氷色それぞれ <small>かき氷の色の違いで、三姉妹それぞれの個性が引き立っています。夏休みの楽しい風景が浮かび明るい句ですね。仲の良い、個性あふれる姉妹の特徴を言いついて。</small> の三姉妹	一切は読経の声と蝉時雨 <small>やかましいのに何故かしーんと静かです。目を閉じ座していると、全身が無になり、あたかも音の中に閉じ込められたような気がする。全</small>	朝霧の中を駆け抜く調教馬 <small>早朝の馬場を駆け抜ける競走馬と馬のコンディションを確めつつ操つている騎手の姿も浮かぶ。調教場を霧の中を走らせるかは知らぬが、美しい景である。</small>	妖怪ばなし昨夜の続き蚊帳の中 <small>夏の夜の就寝前の蚊帳の中、頷けるシーンです。</small>	風死して瀬戸内まつたり動きなし	ひそやかに海月となりぬ閨のうち <small>うわあ色つばい。むかし電気くらげという映画があつたような。</small>	このをんな人に媚びない棕櫚の花 <small>季語の選定が良い。</small>	炎昼やプレゼン終えて缶コーラ	お先にと老ひの追ひ越す夏の峰	海の日 <small>海がなくとも空という大きな青がありますよという雄大な俳句です。ね。とにかく祝日だから！と空を見上げる朗らかさを感じます。「海の日<small>海なし県</small>」というリフレインが諧謔。使いたいと思つた。</small> の海なし県の空の青	
荻野鷹生	檜鼻ことは	染谷風子	小林京子	倉田詩子	木村小麦	日高道を	岡本たか子	渋谷きいち	寒立馬	せんり	網野月を	かげろう	青木鶴城	霜里	

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46
ことは	きいち せんり 鶴城									暦文 六弦 允孝 みづる ことは 音思 ひろし あぎひこ せんり 寒立馬 朝香 鶴城 道を	美枝子 佳月	京子		
螢火や怪しく誘ふけもの道 誘われないようにいたしましょう。	足腰の弱り望郷端居かな 夏のアルプスを思いました。切ないですね。ふとそんなことを想う自分がいいます。	あめんぼう渦をつくりし鏡池	かき氷客に勧めて我も食ふ	天瓜粉額も首も母の色	夏果ててキースリチャーズピアノ弾く	蟻二匹刑事のごとく嗅ぎまはる	道渡ることに不慣れな鹿の子かな	風のなきひと日を木槿咲きかはる	夕凧に足を浸して歩く浜	影連れて影より薄き糸蜻蛉 糸蜻蛉に影とは。「影より薄き」とは良く写生された俳句ですね。気に入りました。糸蜻蛉の姿の儚さに詩情を感じます。切ないですね。糸蜻蛉のはかなき程の美しさが感じられる。糸蜻蛉を影より薄しと称したところに惹かれました。池の上を自由に飛んでいる姿が浮かびます。主体が影よりもさらに薄く透けているとの観察が、翅の繊細さを上手く表現している。糸蜻蛉と強さとはかなさが同時に見えてきました。「影より薄き」が発見。語順がいい。映像も鮮やか。	もうこんな時季かと京に鱧の皮 早くこんな句が詠めるようになりたい。関西人は鱧で季節を感じるのです。	青梅雨の出湯にほつと夜明け待つ	河童忌に納戸の扉あけ放ち	まま事の夫なき家に缶ビール
新暦文	衛	幸子	あきひこ	清川徹斎	小川夏霖	秋谷風舎	森 佳月	しんい	しーしー	荒一葉	河野凡士	高原ひろし	新井史子	持永喜夫

75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	水明インターネット句会（選句・選評） 令和五年七月
	曆文 修		美枝子 一葉 道を			修	俳翁	修 しーしー		寒立馬		小麦 ひろし 風舎		徹斎 かげろう	
夕焼けや食欲そそるカレーの香	水鏡割りて翡翠魚掬ふ	「し」と「の」と「つ」子が読み上げる涸れみみず 滅多に見ることの無い翡翠の一瞬。周囲の樹々が映る水面に飛び込んで魚を獲る翡翠を活写。	郭公や雲のかげ踏む六合目 六合目位迄登れば雲の蔭を踏めるんですね。郭公の声聞きながらの登山、中七下五の措辞が情景をしつかり描写している。雲のかげ踏むの措辞が良いです。	保母さんと手つなぎ散歩花石榴	百日紅女人のごとくすべすべと	夢現名句消えゆく朝寝かな 朝寝の夢現の状態で名句が浮かび消えてゆく実体験か。	猛暑日や町に人消え声の消え 猛暑日の様子をうまく詠まれて脱帽。	相席の香水仄と終電車 終電車に乗って疲れを感じながらも相席の美女の香水の香が仄かに。終電にはいろいろな人生が。	呼び込みの声も鯔背や朝顔市	坂下りて不意に濃くなる沼の風 情景が浮かぶ、むっとしする熱気が伝わる。	ちよいワルに見えて悪いかサングラス	ぐずる子に母が添い寝の団扇風	アルプスの登山電車やハネムーン	せせらぎの優しき調べハンモック キャンプの情景が思い浮かびます。せせらぎを子守唄に心地よく寝られそう。	光雲 2
かげろう	小林土璃	霜里	石関六弦	後記朝香	龍野ひろし	本橋稀香	後藤允孝	俳翁	丸山マスマ	みづる	立野音思	森美枝子	反町修		

90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76
				曆文 きいち かげろう		マスミ	允孝 のり子				一葉 風舎	霜里		
				雪溪の群青の空嶺遠き <small>河童橋を背に徳高連峰を思い出します。夏のアルプスを思いました。背景の青空に雪溪の美しさが際立っている。</small>	白葵てつぺんに咲く真昼かな	鎮魂の水漬く屍よ南風 <small>6月23日は、沖繩慰霊の日。恒久平和と戦没者の追悼の日である。激戦で「水漬く屍」となられた多くの御霊の鎮魂を心から祈るばかりである。</small>	今生の別れ後生の夏の蝶 <small>今生と後世との使い分け。下五の夏の蝶が良いですね。夏の蝶に生まれ変わった「一魂」に出会う夏。</small>	50%オフ思はぬ出費夏セール	蛩狩連れ立つ君へ魔法の夜	先達の杖の頼りや霧深し	愚鈍こそ処世の極意はなむぐり <small>愚鈍こそが処世術と断言する作者に共感。季語が効いている。例句となる佳句である。しかし、少し鼻につく。日本語が効いている。例句と作者は少しも愚鈍とは思っていない。</small>	きりきりと酒を冷やして胡瓜もむ <small>冷たい酒器とキュウリの緑、夏のひととき。</small>	抜くまでに読んで数へて乏し妻	鴨川の遊び木陰の冷素麺
				倉田詩子	小林京子	染谷風子	日高道を	木村小麦	渋谷きいち	岡本たか子	せんり	寒立馬	網野月を	青木鶴城